

## 学生の経験を踏まえた学びを評価するためのシステムの運用と実際

日本福祉大学

報告教員：村川弘城、報告学生：加藤達洋、佐藤真衣、加藤茜

### 1 本報告の背景と概要

大学生生活の4年間で、学生は様々な経験をし、自らの糧とする。その場は、正課教育と呼ばれるような、講義や演習、ゼミ、実習の他に、サークル活動やアルバイト、ボランティア活動なども含まれる。特に本学、日本福祉大学では、その福祉という性質だけでなく、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業による地域との協働による教育を目指していることもあり、ボランティア活動への参加率が非常に高い。これまでは、成績と学位の授与でしか学生を評価することができなかつたため、大学生生活の中のほんの一部しか評価できていなかったといえる。しかし実際には、正課教育以外での経験による成長も大きく、学生自身も、社会としてもその成長の可視化を求めており、それらは、たとえば就職活動の際に、学生自身で自らの経験や学びを面接などで説明しなければならなかつた。これらの成長を上手く拾い上げることができれば、それらを就職活動に利用できるだけでなく、不足部分を補うような講義科目を用意する、得意部分を生かした実習を提案するといった、教育方法の改革にも利用することができる。

本報告では、そのような学生の様々な経験を学びと捉えて評価することができるよう開発した、ポートフォリオと学修到達レポート（日本福祉大学版ディプロマ・サプリメント）という2つの取組について紹介する。

### 2 本報告の流れ

本報告では、学生自身からの報告を中心に3部に分けた構成で行う。

第1に、ポートフォリオと学修到達レポートのシステムとそのねらいを説明する。本学には、建学の精神に基づいて考案された、学部を越えて本学の学生全てに獲得してもらいたい力、日本福祉大学スタンダードがある。本システムでは、日本福祉大学スタンダードを構成する、伝える力、見据える力、共感する力、関わる力、地域社会に貢献する力の5つの力をもとに、学生が自己評価できるように設計されている。具体的に学生は、年度初めに5つの力から1～3個の力を選び、どのように能力獲得に取り組むのかを計画する。年度おわりには、自分たちの計画に対し、5つの力のループリックをもとに自己評価する。つまり、1年ごとのPDCAサイクルを学生自身が回すよう設計されている。

第2に、学生が目線から報告を行う。報告学生は、報告教員が初年次にゼミで担当した学生たちである。ゼミでは、正課内外を含むあらゆる場面での成長を意識させた活動を1年間かけて行わせている。また後期には、グループで地域の課題を解決させる研究活動を実施した。報告するのは、ゼミが終わってからも自主的にそれらの活動を続けている学生たちである。学生からは、「居場所づくりから見える地域課題」というタイトルで、地域の課題を解決するため、自分たちで組織を作り、活動のために様々なところから助成金を獲得し、SNSや地域活動に参加して参加者や協力者を募り、精力的に活動してきたことを報告してもらう。

第3に、これらのシステムを4年間実施した上での成果を報告する。報告学生は現3年生であり、自分たちの学びが社会に出てから生かされるのかを経験していない。そこで、卒業生に対して実施したアンケートの結果の一部をもとに、大学生生活4年間での学びと、それらの学びを卒業後にどう生かしているのかを検討する。卒業生アンケートは、卒業時に5つの力が獲得できているのか、獲得する必要があるのかを、卒業後1年の卒業生に対して実施したものである。